

ニューヨーク・フィルハーモニック前回の来日公演は、2009年。ギルバートが音楽監督に就任した直後のことだった。それから5年、ギルバートのフレンドリーでありつつ妥協のない音楽づくりによって両者の関係はより深まり、アンサンブルは徹底的に磨き上げられた。

「ニューヨーク・フィルハーモニックはもともと、非のうちのころのない輝かしい音を持った楽団でした。私が就任してから彼らと行ったのは、さまざまな作曲家の多様な様式にどのようにアプローチするか、その見解を互いに深めるということです」

ニューヨーク・フィルの音を創り上げた歴代音楽監督を見ると、マーラー、トスカニーニ、バーンスタインと、実に錚々たる顔ぶれだ。世界初演を担った作品も、ドヴォルザークの「新世界より」、ラフマニノフのピアノ協奏曲第3番やガーシウインの「パリのアメリカ人」と、名作が並ぶ。

「かつての名演や楽団の伝統を感じられるのは素晴らしい経験です。しかし同時に、伝統を問い直しながら、今を生きる私たちがどのように作品を解釈するかが大切になります。伝統と現代性のバランスは、常にとっても重要なポイントです」

今回の演目のうち、19世紀の終わりにこの

「今を生きる私たちが
どのように作品を解釈するかが大切です」

指揮

アラン・ギルバート
& ニューヨーク・フィルハーモニック



©Chris Lee

アラン・ギルバート

NY生まれ。幼いころから、アメリカ人の父と日本人の母にヴァイオリンを習う。ハーバード大学、カーティス音楽院、ジュリアード音楽院などで学び、クリーヴランド管弦楽団での副指揮者、サンタフェオペラでの初代音楽監督などを歴任。2009年に生粋のニュー Yorker として史上初めてNYPの音楽監督に就任し、新鮮かつ革新的な仕事ぶりで注目されている。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ボストン交響楽団、シカゴ交響楽団などとも定期的に共演。日本でも、NHK交響楽団や東京都交響楽団などに客演。

小曽根 真

神戸生まれのジャズ・ピアニスト。幼いころから父の影響でジャズに興味を持ち、独学で音楽を始める。1980年に渡米し、1983年ボストン・パークリー音楽大学ジャズ作曲・編曲科を首席で卒業。米CBSと日本人初の専属契約を結び、デビュー作「OZONE」を発表。世界を股に掛けて演奏活動を行う。トップオーケストラとの共演も多く、モーツァルト、ガーシウイン、バーンスタインなどの協奏曲を演奏。現在、作曲やラジオのパーソナリティ、テレビ出演、後進の指導など活動範囲も多岐にわたる。

ニューヨーク・フィルハーモニック

指揮：アラン・ギルバート ピアノ：小曽根 真

2014.2/10(月) 7:00PM

ブリテン：青少年のための管弦楽入門
ガーシウイン：ラプソディ・イン・ブルー
チャイコフスキー：交響曲 第5番 ホ短調 op.64

A 28,000円 B 24,000円 C・D・ブラチナ 売切

主催：KAJIMOTO / ザ・シンフォニーホール / 朝日放送 後援：アメリカ合衆国大使館
ご予約：ザ・シンフォニー チケットセンター 06-6453-2333 (2014年1月6日営業開始)
お問い合わせ：ABC チケットインフォメーション 06-6453-6000※ (2014年1月7日以降)
※2013年12月28日まで、ABC チケットセンターが同番号にて受付致します。

20年ぶりの「ニューヨーク・フィル」が来演！
二大巨匠が奏でる熱いセッション！

「大好きな音の
オーケストラを見つけてしまった」

ピアノ

小曽根 真



©Florian Burger

日本を代表するジャズピアニスト、小曽根真。自らの音楽を磨くため10年前からクラシックを学び直し、今ではクラシック作品においても、彼ならではの新鮮な演奏で聴衆を魅了している。去る10月、小曽根は休暇を利用してニューヨークを訪れ、共演するニューヨーク・フィルハーモニックの演奏を聴いてきた。

「これまで自分なりに心に描いていたクラシックやオーケストラへのイメージが、見事に打ち砕かれました。僕は、大好きな音のオーケストラを見つけてしまった。オーケストラという巨大な怪物が、こんな俊足を持つているとは！肩の力が抜けた状態でありながらリズムにタイトな演奏で、奏者みんながグルーヴを感じているのがわかる。一拍ごとに躍動するんです。アランは指揮台に立たない公演でしたが、日ごろから彼がリズムに対して相当に高い注意を払って音楽をつくっていることを感じました」

小曽根は7月に来日中のギルバートが講師を務めた音楽教育プログラム「ミュージック・マスターズコース：ジャパン(MMCJ)」のレッスンを見て、その際もギルバートのリズムに対する徹底的な指導に驚いたという。

そしてこのとき小曽根が渡した自らの録音が、ふたりをより強く結びつけるきっかけとなる。「共演にむけて、僕が普段やっている音楽を紹介するつもりで、ジャズの録音を渡しました。すると

オーケストラを指揮したことのあるチャイコフスキーの作品からは、交響曲第5番を取り上げる。

「日本でもよく演奏され、またニューヨーク・フィルも長らくレパートリーとしてきた作品です。無限の可能性を持ち、演奏していて常に新たな発見があります」

ガーシウインもまた、オーケストラにとって馴染みのレパートリーだ。「ガーシウインは私の心にとっても近い存在です。そしてニューヨーク・フィルはガーシウインの演奏について豊かな経験を持っています。だからこそ、改めて現代の我々ならではの解釈を見つけなくてはいいかもしれません」

ソリストに小曽根真を迎える「ラプソディ・イン・ブルー」は、おそらく最高にエキサイティングなものになるだろう。

アメリカ最古のオーケストラの音が、日本最古のクラシック音楽ホールであるザ・シンフォニーホールに響くのは、今回20年ぶり。世界が注目するギルバートのタクトが、生命力みなぎる音楽を届ける。

しばらくしてからメールが来て、すばらしい音楽だ、家族で毎日聴いている」と。ニューヨークに行った時も絶対に会おうと言ってくれて、4泊の滞在中2晩は彼と遊んでいました(笑)。アランのジャズのグルーヴへの理解度は、こんなクラシックのミュージシャンには出会ったことがないと思うほど、ホンモノ。家に遊びに行つて、たくさんジャズの話をしました。すつかり意気投合して、まるで20年来の友人のようだ、2月は最高に楽しくなるね！とお互い言い合つて別れました。その後もメールのやりとりをしていて、相棒(妻)からは久しぶりに会えた恋人同士みたいだねなんて言われています(笑) 共演する「ラプソディ・イン・ブルー」は、小曽根が何度も演奏しているレパートリーだ。

「演奏し始めて10年。一旦、すべてをばらして組み立て直そうと思っています。音楽的解釈はそのままだ、指遣いなど基本的な部分を見直して、身体に叩き込む。地道な作業ですが、費やした時間は音楽に現れます。それこそが、共演者への最高のリスペクトだと思つのです」

アメリカの伝統あるオーケストラとの共演に、最初は少々怖さを感じたという。

「新しいものに挑戦することには、絶対に怖さがつきものですから。でも実際に演奏を聴いたら、それはなくなりました。こんなにも斬新な音を出す人たちのなかから、僕が真正面からぶつかつていけば絶対に共鳴し合えるはずだ」とさらに「ザ・シンフォニーホールで演奏することは、神戸出身の小曽根にとって「榮譽に感じること」だという。

「格式高いホールですが、そこにいる音楽の神様はすごく親しみを持てる存在な気がします。それに、お客さんとの距離感が近く、音楽のエネルギが詰まっています。そんな場所で、とにかく精一杯幸せな音楽を創りたい。みなさんに幸せなパワーを受け取っていただけたら」

インタビューの最後に小曽根は、「アランは、出会うべくして出会った人という気がする」と付け加えた。当日は、音楽家の運命的な会遇の瞬間に立ち会うことになるかもしれない。



©K.Miura

横浜でのツーショット